



第**202**号
発行所
一般社団法人 芝蘭会
京都大学医学部同窓会
〒606-8315
京都市左京区吉田近衛町
TEL 075-751-2713
FAX 075-752-4015
E-mail: info@shirankai.or.jp
http://www.shirankai.or.jp

- 主 な 内 容
- ② 退任あいさつ
 - ③ 校友会 KMS-FUND だより
 - ④ 新任あいさつ
 - ⑤ 支部だより「島根」
 - ⑥ 支部だより「神戸」「東京」

医学部教育研究支援基金 (KMS-FUND)

新型コロナウイルス

感染症対策緊急学生支援への

ご寄附のお願い



現在、新型コロナウイルス感染症は世界中で猛威を振るっており、医学部および医学研究科の学生の健康、生活、教育研究、社会活動等に多大な影響を及ぼしています。今後、

① 新型コロナウイルス感染症の影響による保護者等の経済状況が深刻化または診療活動・アルバイトの休止等により収入が減少した学生への奨学支援、

② オンライン授業等の学習環境整備による質の高い教育を維持するための教育支援、

③ 新型コロナウイルス感染症に関する研究を行う学生への研究支援

などが必要不可欠であると考えています。

このような学生への支援を継続的に行うためには充実した財政的下支えが必要となります。

今般、国民の皆様にご支援いただくことが決まりました「特別定額給付金」に限ることなく、皆様からの温かいご支援を心よりお待ちしております。

京都大学大学院医学研究科・医学部長
京都大学医学部教育研究支援基金委員長

ご寄附へのお礼……………

ご寄附いただきました方々への感謝の意を込め、芳名台帳に記録し、未永く保管いたします。

また、100万円以上の寄附者の方には医学研究科長の感謝状をお届けします。1000万円以上の寄附者の方の銘板を作製し、医学部学生会館の横に設置し、お名前を披露いたします。(公表に同意いただいた場合に限ります)

令和2年度 春の叙勲

❖瑞宝中綬章

葛谷 英嗣 (昭41年卒)

元国立病院機構京都医療センター院長

島本 光臣 (昭45年卒)

元静岡市立静岡病院長

北 徹 (昭46年卒)

京都大学名誉教授

清水 孝雄 (教室会員 医化学)

東京大学名誉教授

申込・振込方法

寄附申込書 専用「新型コロナウイルス感染症対策緊急学生支援寄附申込書」にてお申し込みください。
医学研究科の URL
<http://www.med.kyoto-u.ac.jp/general/kmsfund/>

申込方法 上記「寄附金申込書」に必要事項記載のうえ、右記事務局までメール、FAXまたは郵送してください。お申込は随時受け付けいたします。

振込方法 ご寄附をお申し出いただいた後、京都大学より送付する「寄附金振込依頼書」により、三井住友銀行本支店窓口でお振込みください。その場合は手数料は不要ですが、ATMをご利用の場合や他の金融機関をご利用の場合には、手数料が必要となります。

税控除について

法人税法、所得税法における税制上の優遇措置が受けられます。詳しくは京都大学寄附金関連ホームページでご確認ください。
URL: <http://www.kikin.kyoto-u.ac.jp/exemption/>

申込先

京都大学医学部教育研究支援基金 (KMS-FUND) 事務局
〒606-8501 京都市左京区吉田近衛町
京都大学大学院医学研究科・医学部 管理棟 1F 企画広報掛
TEL 075-753-4695 FAX 075-753-4348
E-mail: 060kms@mail2.adm.kyoto-u.ac.jp (*を@に変更してください)

退任あいさつ

上本伸二 滋賀医科大学 学長
富樫かおり 放射線医学講座(画像診断学核医学)
横出正之 京都予防医学センター 動脈硬化診療部長
松原和夫 和歌山県立医科大学薬学部開設準備室 教授
桂敏樹 附属病院 薬剤部長
人間健康科学系専攻 予防看護学分野

肝移植と 外科医育成の30年間



滋賀医科大学 学長
上本伸二

私は1981年に京都大学医学部を卒業し、一般外科のトレーニングを修了した後に小児外科医を志して1986年に京都大学大学院に帰学しました。ところが小児外科が所属する第2外科は肝臓外科を専門とする小澤和恵教授が生体肝移植の開始を準備しており、私たち小児外科も肝移植の研究に参加する形となりました。そして、生体肝移植の当初の対象は小児症例であったことから、1990年の生体肝移植開始に主治医として参加することとなりました。

厳しかった成人生体肝移植の成績は、サルコペニア評価に基づく栄養とリハビリの介入で生存率95%以上という予想以上の好成績を達成し、さらに肝胆膵領域悪性腫瘍の術後予後にもサルコペニアが大きく影響する事実を見出しました。

一方で、人口180万人の三重県の医療を三重大学関係者だけで行っているという特殊で厳しい環境の中で、地域医療と臨床教育担当副院長として若手医師のリクルートと卒前卒後教育に奔走したことが地域外科医療を考える契機となりました。2006年に京都大学肝胆膵・移植外科教授として帰学してからは生体肝移植の成績向上と後進の育成、および関係病院を含めた外科医教育システム作りに取り組んだ14年間だったと思います。移植後生存率が80%と

植開始と高難度肝胆膵外科手術推進と並行して、大学院生の研究指導に力を入れました。社会人大学院という中途半端な研究体制では大学全体の研究能力は上がらず、研究活動向上がなければ大学病院としてのレベルアップはあり得ないと考えるようになりました。

また、2014年からは医学研究科長兼芝蘭会会長を4年間務めさせていただきましたが、芝蘭会の皆様のご支援に改めて御礼申し上げます。2020年4月から滋賀医科大学学長として医学教育と医療に関与できる立場にあります。これまでの経験を生かして滋賀県医療のさらなる向上と滋賀医科大学の全体的な底上げに尽力していく所存です。引き続きのご指導を賜りますようお願い申し上げます。

放射線医学講座 （画像診断学・核医学）での 16年を振り返って



放射線医学講座
（画像診断学・核医学）
富樫 かおり

2004年5月1日より医学研究科放射線医学講座（画像診断学・核医学）教授を拝命し本年3月末で無事定年となりました。就任初年は大学法人化に加え同年開始の新臨床研修制度（前期研修2年間の義務化）による専門研修医不在という荒波の中の船出であり、ただひたすら難波しないように念じておりました。その後スタッフも徐々に充実、また京都大学医学部附属病院のご理解により老朽化した機器の更新をすすめ、現在では最先端の高精細CTを含むCT5台、MR5台、PET-CT2台等を備え、外来受診当日でも急ぎのCT検査はほぼ施行可能となり、病院中央診療部門としての機能を果たせるようになっております。4月よりサイクロトロン2台体制、GMP基準に合致する日本一の施設がオープンし、核医学領域の飛躍的発展と診療・研究への貢献が期待されております。腫瘍病変において薬剤の標的の発現状態をみることで非侵襲的かつ早期の治療

効果予測が可能となることは診療への貢献が極めて大きく、また創業において基礎研究の成果を臨床につなげる架け橋の役割も担っていくと考えております。私自身は1985年の大学院在学中より婦人科領域MR画像研究を専らとしてまいりましたが、2006年以後、国プロジェクトへの参加にて医工連携、産学官連携という新しい領域・研究に携わる機会を複数いただきました。この中で協同した企業とは国プロジェクト終了後もsponsored research program、産学共同講座設置等により研究を継続、CT、MR、CAD（computer aided diagnosis）・AI研究へと幅広く実を結びつつ広い領域において多くの若手研究者が育ち活躍しております。この16年の在職中に最も注力したのは教育と人材育成です。この四半世紀、画像診断機器の進歩は著しく、需用に比し圧倒的に不足する診断専門医を育成し、京大病院並びに関連病

院の診療レベルを支え、さらにその中から高いアカデミックマインドをもち次世代を牽引する研究者を育てようとしてまいりました。14年間での入局者は117名を得、うち89名が帰学、28名が学位取得後留學等ののち現在大学の教員としてあるいは関連病院の中堅として活躍しております。彼らは本当に頼もしい存在ですが、昨今の若手は極めて家族思いでもあり遠隔地への中堅の派遣や頻回の夜間緊急呼び出しは難しい問題となりつつあります。難易度の高い緊急手技を頻回に必要とする基幹病院を遠隔地に多数擁する芝蘭会の今後を考えますと、大学と関連病院との密な連携がいままで以上に重要であると思われ、ぜひ次世代の先生方のお知恵で解決いただけたらと思っております。末尾となりましたが、右も左もわからない当初から16年という長い間、医学研究科の先生方、関連病院の先生方に大変お世話になり温かいご支援を頂きましたことを心より御礼申し上げます。

臨床研究の発展をめざし 築きあげた研究教育体制



京都予防医学センター
動脈硬化診療部長
横出 正之

令和2年3月31日付けで定年退職するにあたりご挨拶申し上げます。私は昭和54年に本学を卒業後、当時の第3内科（現循環器内科）に入局し、米国留学を経て、平成5年より老年科所属となり、平成14年11月に探索医療センター探索医療臨床部長に任ぜられました。探索医療臨床部は本センターに探索医療開発部、探索医療検証部が設けられたあと、最後に開設された部門で、この時期、グレリン創薬プロ

ジェクトの臨床試験が開始されようとしており、私は着任早々に試験責任医師を任されました。当時はまだCRC業務を行う医療専門職も配置されておらず、私自身、被験者のリクルートのポスター作成と配布、毎朝病棟で被験者にグレリンを静注したことが思い起こされます。その後、教室には、教員、CRC業務を担当する医療専門職など、中心的な役割を担うスタッフが集まり、臨床研究を支援し、被

験者のケアを任務とする組織に育ちました。これらの歩みは当時まだ萌芽的だった我が国のARO（アカデミア発臨床研究機関）構築に向けての先駆的な取り組みだったと思います。その後、当部は初期の試験責任医師とCRCのみではなく、研究を司る診療科との連携と研究支援を任務とするようになり、これに応じて医療専門職もCRCから試験の進行を広くに調整するステディマネージャーとして活動することになりました。このように、私が着任したころにはなかった職種が生まれ、センターで活動するのをみまうと隔世の感があります。また、教育では国内外から修士ならびに博士課程の学生を多数受け入れたほか、大学院生の臨床研究コースを担当することも、臨床心理士を研究員に迎えることにより、臨床研究に参画する被験

病院薬剤部の 在り方と再開発



和歌山県立医科大学
薬学部開設準備室 教授
附属病院 薬剤部長
松原 和夫

本年3月に、京都大学附属病院薬剤部教授を定年退職しました。2012年の着任からあつという間の8年間でした。離島の保健所、島根医科大学（現島根大学医学部）、旭川医科大学と本学病院から遠く離れていた私が着任したのは、病院薬剤部の運営をさらに診療に近づけたいとの京大病院の意向であつたと思っております。京大病院のような高度先進医療技術を開

発・提供する大学病院では、薬剤部業務は医療の基礎部分を支えるという業務をより丁寧展開すべきだと考えていました。着任時の薬剤部は、外来棟の1階と地下、ホスピタルストリートの2階に病棟薬局、積貞棟、西病棟と本部の保健管理センターと6か所にも分かれ、それぞれ薬剤師を置かなくてはならず、マンパワーの分散が大きな問題でした。これは薬剤部本体が外

来棟のセキュリティ内にあったことから、休日及び夜間用にセキュリティ外にも薬剤をもつ必要があったからです。これは薬剤部組織の見直しを行う上で大きな障壁であり、私に託された8年間で足りるのか不安でした。しかし、地下にあったカルテ室が空くことにより、1階の一番良い場所に薬剤部が居る理由もなく、薬剤部の大部分を現在の地下へ統合することが可能となりました（薬剤の受け渡し口はセキュリティドアの外）。この考えが頭に浮かんだ時はほんとうに有頂天になりました。さらに、薬剤部の1階を閉鎖することによって、外来棟1階の再開発が進んだことはうれし限りです。その後の改革はスムーズでした。30歳前後の若い薬剤師をリーダーとするフレキシブルな組織とすることによって、より効率的に人が動け

学科、保健師課程、 大学院の立ち上げと 教育研究の基盤づくりに21年



人間健康科学系専攻
予防看護学分野
桂 敏樹

速いもので京都大学医学部保健学科（現人間健康科学科）設置準備のために山形大学医学部看護学科地域看護学講座保健師課程教授から京都大学医療技術短期大学部に赴任して21年が経ちました。多くの皆様のご支援・ご協力を賜りながら、学科、保健師課程、大学院、予防看護学分野の新設と教育研究の基盤づくりに奔走した日々でした。その甲斐あって保健師課程卒業生、予防看護学分野大学院修了

生は、保健師、上級職行政公務員、教育研究職として活躍しています。退職を迎えて感慨深いものがあります。教育では、新たに保健師課程の立ち上げ、予防看護学の構築と行政保健師の育成支援が主な仕事でした。これまで「Think Globally, Act locally」を大切に、地域住民、就労者のための生活習慣病・介護予防、健康政策策定・評価、健康な街づくり等の研究を基に、保健活動、政策制

度等の実装を進め、それらに大学院生の参画を図りました。目的は研究と活動を乖離させず相互補完的に発展させ、予防活動を地域に実装できる人材を予防看護学分野から輩出したいと考えたからです。この教育方針に沿って輩出した保健師が充実した現任教育を享受できるように行政と協働して保健師育成ガイドラインを作成し、研修会を企画実施して保健師育成を後方支援する体制を整えました。しかし、近年健康の社会的決定要因が従来の保健部門の守備範囲を超えたものになっています。保健師の分散配置が進み、難解な多重課題を有する支援対象や複雑な健康危機管理の事例発生が増えるなかOn the Job

る体制にすることができました。これは、個々の薬剤師の能力が高かったためにできたことです。何れにせよ、何とか京大病院の一部門として薬剤部を立て直すことができたように思います。一方、薬剤部の研究テーマとしては、医療の中で薬学出身者が得意とする分野の展開を行ってきました。つまり、薬物動態や薬剤性腎機能障害、抗がん剤による神経障害などの副作用に関連することがあげられます。それなりの成果は出てきていると思っております。芝蘭会の会員の皆様には就任以来、温かい励ましのお言葉を頂き心よりお礼申し上げます。今後は、和歌山県立医科大学に併設される薬学部の設置準備と病院薬剤部の再開発に努める所存です。引き続き、ご指導・ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

研究は、地域・職域における生活習慣病予防、介護予防、政策策定評価、健康な街づくりと地域システム構築を主としています。Act locallyの具現化として京都府等地方自治体、国民健康保険団体連合会、全国健康保険協会等、地域・職域のEBC DaSを活用した政策・制度の評価、保険料率の適正化、地域包括ケアシステムのモデル構築、ライフコース健康増進システム構築を手がけました。今後、少子高齢化社会の先を見据えた、ライフコースで一貫したシームレスな地域予防システムの構築と研究に専心しますので、引き続きご指導ご鞭撻の程宜しくお願い申し上げます。退職に当たり教育研究の環境を与えていただきました芝蘭会並びに研究科教職員の皆様に衷心より感謝を申し上げます。定年のご挨拶と致します。

京都大学医学部 校友会・教育研究支援基金

(KMS-FUND) だより

〒606-8501
京都市左京区吉田近衛町
京都大学医学研究科事務部
総務企画課企画広報掛
TEL 075-753-4695
075-753-4322
FAX 075-752-1528
Mail-Address:
kyoto-kms-fund@office.
med.kyoto-u.ac.jp

ハードとソフトの両輪で さらなる飛躍を支える



KMS-FUND 委員長 (2020 年)
耳鼻咽喉科・頭頸部外科学 教授
大森孝一

このたび、令和 2 年の京都大学医学部教育研究支援基金 (Kyoto University Medical Student and Researcher Support Fund : KMS-FUND) 委員会の委員長を拝命いたしました耳鼻咽喉科・頭頸部外科学の大森孝一です。よろしくお願いいたします。

KMS-FUND は、平成 19 年に「学生の学習や研修活動の教育支援、大学院生の研究活動

などの研究支援」を主な目的として設立され、発展してまいりました。基金創設によって、学生の御両親、御家族や同窓生である芝蘭会員並びに教職員が、京都大学医学部における学生の学習・研究環境整備に貢献できる枠組みが整いました。

KMS-FUND の事業は、医学部学生会館の建設 (平成 22 年竣工) に始まりました。医学部北門の近くにある学生会館は、ハード面で大きく学生生活を変えたと思います。現在、クラブ活動の部室や 24 時間利用可能な自習室として活用されており、学生生活の充実と学習効率の向上に寄与しています。私が学生の頃はこのような施設はなく、当時と比較すると今の学生は恵まれていると感じていますが、医学部構内がきれいになってよかったです。平成 26 年度からは、学生会館の清掃事業も

大学医学部の臨床実習 (ポリクリ) は現在、5・6 回生の間に 72 週間のハードスケジュールとなっており、関連病院の臨床教授の先生方に御指導をお願いする場合も多いです。学生にとっては第一線の市中病院で学ぶことができる貴重な機会ですが、

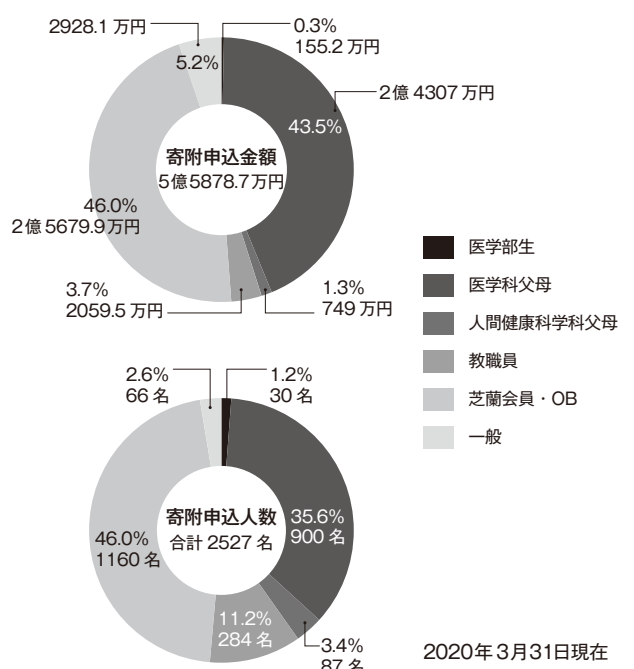
京都大学の関連病院は、東は静岡県から西は福岡県まで広範囲にわたっており、学生の交通費や宿泊費の負担は軽くないため、本助成を行うこととしております。

このように、KMS-FUND は、学生の生活・勉学を広くサポートする施設整備と京都大学ならではの教育や研究に携わる学生へのサポートの両輪で事業を進めてまいりました。お陰様で、令和 1 年度までの累計基金総額は 5 億円を超えました (寄附者数 2527 名)。また、令和 2 年 5 月から新型コロナウイルス感染症対策として緊急学生支援寄附の受付を開始し、御支援いただいたいております。皆様の温かいお気持ちに心より感謝申し上げます。

その一方で、京都大学医学部、医学研究科は、世界的な医学の教育、研究、医療機関をめざして発展していくべき使命がありますが、国内外の医学部に比べるとまだまだ改善していく課題が多くあります。

そこで、令和 2 年度から新たにクラウドファンディングにより研究者を支援する仕組みを取り入れました。京都大学医学部から継続して世界的な研究成果を発信できるように、環境整備につとめてまいりたいと思います。

令和 2 年教育研究支援基金 (KMS-FUND) 委員会委員			
委員長	大森 孝一	耳鼻咽喉科・頭頸部外科学 教授	
	斎藤 通紀	機能微細形態学 教授	
	竹内 理	医化学 教授	
	溝脇 尚志	放射線腫瘍学・画像応用治療学 教授	
	伊達 洋至	呼吸器外科学 教授	
	古川 壽亮	健康増進・行動学 教授	
	山田 均	芝蘭会事務局長	
	廣瀬 幸司	医学研究科事務部長	



新型コロナウイルス感染症の影響で、社会も医療も急速な変革を求められています。このような激変の時代におきましても、力を合わせて京都大学医学部の教育・研究環境をさらに改善させるために、引き続き、芝蘭会、校友会ならびに関係の皆様方、より一層の御支援を心より御願ひ申し上げます。

令和元年度卒業生代表あいさつ 激動のなか旅立つ春

加川裕美子



に聞いてくれたのが祖父でした。祖父との別れは受け入れ難く、一時は埋めようのない寂しさに泣いてばかりの日々でしたが、そんな私を家族が支えてくれました。亡くなった祖父との思い出を家族と語り合うなかで、死の悲しみが感謝へと変わっていき、今は温かな気持ちで懐かしむことができます。卒業の姿を祖父に見せられなかったのは残念ですが、この経験を通して、患者さんだけでなくそのご家族にも寄り添える医師になりたいと思います。

そして、この 6 年間では、尊敬できる先輩方、可愛い後輩たち、そして何よりかけがえのない友人たちと出会うことができました。私は自治委員として学年の皆と関わる機会が多々ありましたが、折に触れて「いつもありがとう」や「何か手伝えることがあれば言ってね」と声をかけてくれる同級生たちの存在はとても有難かったです。悩みを分かち合い、くだらないことで笑い合える、そういった関係に恵まれて、私の 6 年間は彩り豊かなものとなりました。

卒業式が中止されたことで、別れを惜しむ機会がないまま離ればなれになってしまう友人もあり、今は無念で心寂しく思うこともあります。しかし、この悲しい経験も、いつか一生の思い出になるはずです。近い将来、同級生の皆が集まって「あのときは大変だったね」と笑い合える日が来ることを、私は心から願っています。

最後になりましたが、ご指導くださった先生方、今まで私たちを支えてくださった保護者の皆様、ならびに関係者の皆様には、卒業生を代表し厚く御礼申し上げます。京都大学医学部がこれから素晴らしい歴史を歩んでいくこと、そして今は一刻も早く穏やかな日常が戻ることを祈念して、卒業生代表の言葉をさせていただきます。

さて、思い起こせば 6 年前、私たちは期待と不安を胸に入学の日を迎えました。それから今日まで、歩んできた大学生活はひとりひとり違うものですが、私にとっては「ご縁に恵まれた 6 年間」だったように思います。本学の先生方は、私たち学生にとっても熱心に向き合い、私た

ちの学ぶ意欲をいつも歓迎してくださいました。講義や実習では最先端の研究や医療現場を知ることができ、また、マイコースプログラム等で実際に研究に参加させていただくこともできました。こうした経験や研究室を通じて知り合った方々との出会いが、自分の将来を考えるきっかけにもなりました。

さらに、5、6 回生の臨床実習では、たくさんの方と患者さんとの出会いがありました。がんや闘病中にもかかわらず、遠方から実習に来る私を毎日気遣ってくださった患者さん。脳梗塞による意識レベルの低下と認知症で意思疎通が難しいなか、実習最後の日に「来てくれてありがとう」と途切れ途切れに伝えてくださった患者さん。2 年間の実習ではいくつもの優しさに触れ、人としても成長できたように感じています。

しかし、出会いがある一方で、悲しい別れを経験したのも臨床実習の時期でした。それは、長年闘病生活を続けていた祖父との死別です。

新任あいさつ

早期医療開発の
〈場〉と〈人〉の醸成次世代医療・iPS細胞
治療研究センター
（Ki-CONNECT）教授
中島貴子令和2年3月1日付けで次世
代医療・iPS細胞治療研究センター（Ki-CONNECT）
の教授を拝命いたしましたので、芝蘭会会員の先生方にご挨拶申
し上げます。

私は平成10年に横浜市立大
学医学部を卒業し、総合内科
医、腫瘍内科医として診療、研
究、教育に携わってまいりまし
た。国立がん研究センター、聖
マリアンナ医科大学臨床腫瘍学
講座にて幅広く治療開発に携わ
る中で、既存の開発路線を脱し
た早期医療開発プラットフォーム
の必要性を強く感じておりま
した。それを実現しうるKi-
CONNECTというチャンスを
与えていただいたことに深く
感謝し、ここに所信表明させて

いただきます。

当時の国立がんセンター東
病院臨床開発センターにて、私
が早期医療開発に最初に関与し
たenhanced permeability and
retention effectとdrug delivery
systemに関する前臨床・臨
床 proof of concept（POC）
研究は反省の多いものでし
た。Agent Xは多くの細胞実
験、patient-derived xenograft
（PDX）モデルで有望な結果
を示したにも関わらず、今もな
お上市されておられません。早期
臨床試験における対象選択がベ
ストではなかったと後悔してい

ますが、当時の自分は疑問を感
じながらも製薬企業に開発の方
向性について強く意見できな
かったのです。しかしさらに前
の評価系にも落とし穴はありま
した。モデルで示される効果が
ヒトで臨床的意義のある程度に
再現されるかはPDXモデル
を用いてもなお容易に予測でき
るものではありません。今では
オルガノイドなどの進化系モデ
ルでの評価に加え、coclinical
試験、Phase試験など、より
早期でのヒトへの投与データが、
開発期間を短縮し成功率を高
めると考えられています。

しかしそのような研究成果
を継続的に発信している組織
は、現時点で世界中どこにも
ございません。非臨床・臨床
POCの狭間である死の谷に
立ち、両者を手つなぎし、
the patientのポリシーでゴール
を設定し、プロジェクトを牽引
できる研究者がいらない、また新
しいチャレンジができる〈場〉
がないからでしょう。Ki-
CONNECTは、病院機能と
してはそのような〈場〉であり、
講座機能としてはそこに立つ
〈人〉を育成する分野であるべ
きと考えております。

京都大学の最強の武器の一つ
であるiPS細胞を含め、本
学の世界に誇る研究者・成果
は、上記の早期医療開発の弱点
を克服する手段となるのは間違
いありません。iPS細胞研究
所（CiRA）、クリニカルバ
イオリソースセンターなどの
評価系の確立を含むコラボレ
ーション、「医学領域」産学連携推
進機構（KUMBLE）や先端
医療研究開発機構（iACT）
によるシーズインキュベーショ
ン、研究立案実施に対するサ
ポートも強力なバックグラウン
ドです。このような恵まれた環

境でスタートを切れる幸運に感
謝しながら、難病やがんの根治
を目指し、scientific creativity
を生み出す超早期探索的臨床試
験を恒常的に立案・実施できる
早期医療開発プラットフォーム
を構築していきたいと考えてお
ります。そして早期医療開発が
教育分野として成立するため
には、疾患、病態、分野、コミュニ
ティーを超えた自由な議論と相
互教育が重要と考えております。
つきましては芝蘭会会員の先生
方におかれましては、多方面から
のご指導・ご助言を何卒よろし
くお願い申し上げます。

書評

ユニークな外科医の
只ならざる提案邊見公雄『令和の改新―
日本列島再輝論』を読む

赤松 正雄

（元衆議院議員）

今から25年ほど前だったろう
か。赤穂に大変ユニークな病院
長（赤穂市民病院）がいてと聞
いて、会いたくなった。当日そ
の人は下駄の音も高らかにやっ
てきた。背広に下駄。お顔には
長い顎髭。いでたち付まいから
して大層変わっていた（当時は
白髭でなく赤ひげに、私の目に
は映った）。以来、様々の場
面でご指導、ご鞭撻を頂き、お付
き合いを重ねてきた。誰あろう、
つい先年まで全国自治体病院協
議会会長（現在は名誉会長）を
務めていた邊見公雄さんである。
その彼がこのたび『令和の改
新』なる本を出版された。一読、
日本を再び輝く国に変えたいと
の溢れんばかりの心情が伝わっ
てきた。笑いと涙なしには読め

ない。面白くてためになる深い
本である。改めてこの人の凄さ
を思い知った。日本の行く末に
関心を持つ人びと全てにとつて
必読の書だ。

邊見さんは、この本の中で
多くの貴重な提案をされている。
第1章と巻末の「平成こぼれ
帳」に集中。この中から私が勝
手にベスト5を挙げてみる。第
一に、子供が選挙権を得るまで、
母親に子供の数だけ投票権を与
えること（父親は誰の子かわか
らないこともあり外す）。第二
に、中央省庁の地方移転。46道
府県に少なくとも一つの政府機
関を置くことから始めるべし、
と。一番急がれるのは、気象庁
の沖縄移転。第三に、皇室の分
居。高松宮家は高松に、常陸宮

「新型コロナウイルス騒ぎ」で俄かに真
実味を帯びてきた。リニア、原
発も改めて立ち止まって考える
必要がある。いずれも私は大
賛成である。

第2章は医師（外科医から病
院経営者としての「自伝」の趣
き。破天荒な活躍の中に、胸詰
まる失敗談も挿入されていて極
めて印象深い。人情断としてこ
れ以上は望めないほどの〈栄養
源〉が詰まっている。第3章は、
日本病院団体協議会（日病協）の
立ち上げや、中央社会保険医療
協議会（中医協）での活動などを
巡っての「回顧録」の趣がある。
総じて、ご本人は、遺言のつも
りとして書かれたという。全編
に漲る強い信念と大確信の所
産であることがビシビシ伝わっ
てくる。医療に従事する人はも
ちろん、全ての患者さんに読ま
せたい。日本中の医院の待合
室に置かれることを望む。ただ、
読点が極めて少ない分、当初は
読みにくさがいささか付き纏う
だが、読み進むにつれて、著者
独特のリズミカルな文章展開と
分かって、もうクセになりそ
う。政治家、物書きの端くれと
して、邊見さんの提案や生き方
に心底から眩しさを感じる。こ
ういう人こそ厚生労働大臣に、
いや総理大臣になって貰いた
かった。（2020年3月16日）

「新型コロナウイルス騒ぎ」で俄かに真
実味を帯びてきた。リニア、原
発も改めて立ち止まって考える
必要がある。いずれも私は大
賛成である。

第2章は医師（外科医から病
院経営者としての「自伝」の趣
き。破天荒な活躍の中に、胸詰
まる失敗談も挿入されていて極
めて印象深い。人情断としてこ
れ以上は望めないほどの〈栄養
源〉が詰まっている。第3章は、
日本病院団体協議会（日病協）の
立ち上げや、中央社会保険医療
協議会（中医協）での活動などを
巡っての「回顧録」の趣がある。
総じて、ご本人は、遺言のつも
りとして書かれたという。全編
に漲る強い信念と大確信の所
産であることがビシビシ伝わっ
てくる。医療に従事する人はも
ちろん、全ての患者さんに読ま
せたい。日本中の医院の待合
室に置かれることを望む。ただ、
読点が極めて少ない分、当初は
読みにくさがいささか付き纏う
だが、読み進むにつれて、著者
独特のリズミカルな文章展開と
分かって、もうクセになりそ
う。政治家、物書きの端くれと
して、邊見さんの提案や生き方
に心底から眩しさを感じる。こ
ういう人こそ厚生労働大臣に、
いや総理大臣になって貰いた
かった。（2020年3月16日）

支部
だより

島根

リーダーシップから
精神医学を考える

令和元年11月9日（土）、玉
造病院附属健康増進ホームにて、
令和元年度芝蘭会島根支部総会
が開催されました。池田登先生
司会のもと、はじめに島根支部
長の中川正久先生がご挨拶なさ
れ、その後会計報告等議事が執
り行われました。そして、医学
研究科脳病態生理学講座教授・
村井俊哉先生から芝蘭会本部報
告がなされ、医学研究科・医学
部の現況が島根支部の先生方に
伝えられました。

その後、村井俊哉先生による
「社会性」という視点から見た
精神医学―共感力、リアリズ
ム、うつ、リーダーシップ」と
題された特別講演がなされまし

た。村井先生は講演の中で、創
造性、リアリズム、共感性、レ
ジリエンス（ストレスに適応し
回復する力）の4つを現代精神
医学におけるキーワードとして
挙げられました。これらの要素
はリーダーに求められる資質で
もありながら、精神疾患との関
連があると考えられているそう
です。

講演は、村井先生が翻訳を
担当なさった『一流の狂気―
（ナシア・ガミール著）という本
をもとに、危機的状況を乗り越
えたリーダーに関する精神医学
的分析と、それと対照的な「ホ
モクリット」と呼ばれる人々
との比較というかたちで進めら
れました。「ホモクリット」と
は、心理学実験における分布の
中央に位置する集団を指す用語
で、うつや双極性障害といった
気分障害とは真逆の人のことだ
そうです。興味深いのは、社会
の変化に乏しい平和な時代にお
いては決まった規範に従って行
動するのに長けたホモクリット
のリーダーが成功を収める傾向
にある一方で、変革の時代にお
いては状況に即した決断を下す
ことのできる非ホモクリットの
リーダーのほうが成功を収めて
きたと考えられるということです。
このことは、精神的健康が

成功につながるかと考える一般常
識を覆し、精神疾患に対するマ
イナスイメージを払拭すること
につながるのではないだろうか
という考えを述べ、村井先生は
講演を終えられました。

その後、総会・特別講演の執
り行われた部屋を出て、健康増
進ホームを見学した後、懇親会
が行われました。懇親会では先
生方が順番に近況報告をなさり、
話に花を咲かせる一方で、多く
の先生方が地方病院
の医師の減少につい
て嘆かわしそうに語
られていました。ま
た、村井先生とご同
級の先生が学生時代
の思い出について語
られる一幕などもあ
り、にぎやかな雰囲
気のなか、惜しまれ
ながらも会は解散と
なりました。

その後、島根支部
の先生方のご厚意に
甘え、我々雑誌部員
2名は近隣の日帰り
温泉に入っていただ
きました。我々学生
の身に余る大変いい
お湯でした。健康増
進ホーム内にも温泉
施設があり、温泉地
という特性を生かし

令和元年度
京都大学医学部芝蘭会島根支部総会

神戸

生殖細胞研究と産婦人科医療の最先端

令和2年2月11日（火・祝）、兵庫県医師会館2階大会議室にて令和2年度芝蘭会神戸支部総会ならびに懇親会が開催されました。はじめに芝蘭会神戸支部会会長の北徹先生からのご挨拶がありました。続いて前年度総会からの活動状況報告などが行われました。

その後、神戸平成病院の林雅造先生の司会進行のもとで学術講演が行われました。まず、「精子と卵子を作る科学——生命継承機構の探求」と題して、京都大学高等研究院教授（医学研究科機能微細形態学兼担）の斎藤通紀先生がこれまでの研究成果と今後の展望について講演されました。

研究内容が最先端だけに講演内容は大変難しかったのですが、斎藤教授は生殖細胞に関



する研究の歴史、現状、課題などを1回生である私でも理解できるくらいわかりやすくお話ししていただきました。生殖細胞に関する研究の医療への応用は、1978年に世界初の体外受精児であるルイーズ・ブラウン氏が産まれたことに始まりま

す。のちにこの成果が認められ、体外受精技術を確立したロバート・G・エドワーズ氏はノーベル生理学・医学賞を受賞しています。驚くべきことに、現在の日本では、約17人に1人の割合で体外受精児が誕生しているそうです。また、重要なことに、生殖細胞に関する研究は、ES細胞の樹立、さらにはiPS細胞の誘導にもつながりました。

そうした中で、斎藤教授は、生殖細胞が、エピゲノムをダイナミックに制御しあらゆる細胞に分化し個体を形成する能力を獲得するメカニズムを研究されてきました。講演では、教授の最新の研究成果についても詳しくお話しいただきました。特に印象に残ったのが、ヒトのiPS細胞から始原生殖細胞様細胞へと誘導する技術の開発についてです。iPS細胞を用いた生殖細胞の研究がこ

こまで進んでいて、様々な形で、将来医療に役立つ可能性があることを知り驚きました。そして高度に医学が発達した現在でも、生命の誕生に関しては未だ分からな

いことも多いと実感し、その仕組みにさらに興味が湧きました。

次に、「情報化社会の産婦人科医療」というテーマで京都大学大学院医学研究科婦人科学・産科学教授の万代昌紀先生が講演されました。講演は注意を引き付けるような導入に始まり、非常に構造化された構成で進んでいったので内容が大変頭に入りやすかったです。

はじめに万代教授は現在の若手医療関係者にありがちな欠点についてお話しされました。すぐにわかりやすい答えを見つけないとすると即答主義、診断できれば治療は簡単だと思ひ込んでしまふ診断偏重主義、すぐにマニュアルに頼ろうとする効率主義など、明らかに現在の大学受験のための詰め込み勉強の弊害と思われるようなものばかりでした。このままでは人間よりはるかにシステムティックでデータ容量の多い処理のできるAIに負けてしまふと考えられるため、データを集めて使う「能力・時代の変動性に対応する力が求められるのではないかと提言されていました。こうしてよくない傾向は自分にも思い当たる節があつてハッとさせられ、同行した雑誌部の先輩とも総会後その改善法などについて語り合いました。

東京

「健康科学フォーラム」人の一生を視野に。ゲノム解析の応用等に期待

うと述べられました。第二に、従来のがん投薬治療はなるべく多数の患者を治療することを最大の目的とし、結果として投薬の効果が現れない患者が出てきてしまふのが欠点でした。近年こうしたRCTによる標準化治療に疑問の声が上がりはじめていて、バイオマーカーによる個別化治療への転換が促されています。個別化治療に移るのは容易なことではないですが、肺がん治療においては日本でも現在四つの薬を使い分けた個別化治療が行われているのです。こうした治療の細分化を行うためにもバイオマーカーの研究が急務となってくるだろうとお話しされました。第三に、がんゲノム診断の分野ではAIの活躍がめざましく、かなりの確率で遺伝病の診断をすることが可能になってきているようです。AIはビッグデータの活用、自己学習、新たな概念の構築という三つの機能を持ち合わせているということとを、AI将棋の例を交えてわかりやすく説明していただきました。今後の課題としては胚のゲノム編集をどこまで許可していくのかを明確かつ詳細に法で定めることが最優先であると述べられていました。

こうして総会が終了した後は、恒例の場所となっている中華料理店での懇親会が行われました。食事が用意される間、決算報告などの事務報告が行われました。その後各テーブルで美味しい食事を楽しみながら近況を話されたり、はたまた医療の現状や未来についての熱い議論が繰り広げられたりと大変密度の濃い懇親会でした。私が日頃気になっていた医療現場に関して拙い質問をした際も、大変丁寧に答えてくださりました。医療に

関してのリアルなお話を聞くことができ、非常に面白かったです。こうしてあつという間に時間は過ぎ、惜しまれながら解散となりました。さらにその後

も、世代を超えてともに支え合える交流の場を目指したいと述べられました。



また、腸内フローラの重要性に関するお話も面白かったです。腸内細菌がつくる代謝物が人間の心身のコンディションを決め

ており、腸内フローラを変化させることで花粉症などが予防できるかもしれないということです。花粉症で悩む人たちが増え続けている今の状況が変わってくれ

余談にはなりますが、伊藤先生はNHKスペシャルの食の起源の第1集の「ご飯」の回にゲスト出演されており、番組を観ていた私は伊藤先生に直接お会いできて嬉しかったです（笑）。歴史を遡って食の起源を紐解いていくとても楽しい番組だったので是非ごらんください！

講演が終わると別室で写真撮影をし、大高先生の進行のもとで第三部の懇親会が行われました。懇親会にはSantitas Party（立食形式）で新入会員、ごぶさた会員をはじめ、東京で活躍の先生方の興味深いお話を拝聴することができました。会食しながら先生方とお話しでき、学生時代のお話も沢山伺えてとても楽しかったです。

（文責・4回生 岡和来）

人事異動

R2.3.31	北山 仁志	辞任	分子腫瘍学准教授 ➡ 京都大学研究推進部特定職員
R2.3.31	BROWN III, John Ellsworth	辞任	医学教育・国際化推進センター講師 ➡ Boehringer Ingelheim Pharma GmbH&Co.KG Principal Scientist
R2.3.31	SUGUIMOTO WATANABE, Sonia Pilar	辞任	医学教育・国際化推進センター講師
R2.3.31	福原 俊一	辞任	医療疫学教授 ➡ 医学研究科研究員
R2.3.31	小池 薫	辞任	初期診療・救急医学教授 ➡ 京都医療センター院長
R2.3.31	富樫 かおり	辞任	画像診断学・核医学教授
R2.3.31	坂井 義治	辞任	消化管外科学教授 ➡ 大阪赤十字病院院長
R2.3.31	上本 伸二	辞任	肝胆膵・移植外科学教授 ➡ 滋賀医科大学学長
R2.3.31	松本 繁巳	辞任	腫瘍薬物治療学准教授 ➡ リアルワールドデータ研究開発講座特定教授
R2.3.31	大日 輝記	辞任	皮膚科学准教授 ➡ 香川大学医学部附属病院教授
R2.3.31	高折 恭一	辞任	肝胆膵・移植外科学准教授 ➡ 市立長浜病院副病院長
R2.3.31	本田 哲也	辞任	皮膚科学講師 ➡ 浜松医科大学医学部皮膚科教授
R2.3.31	久保 武	辞任	画像診断学・核医学講師 ➡ 天理よろづ相談所病院放射線部部長
R2.3.31	山崎 俊成	辞任	泌尿器科学講師 ➡ 神戸市立医療センター中央市民病院医師
R2.3.31	太田 壮一	辞任	整形外科学講師 ➡ 関西電力病院脊椎外科・手外科・整形外科部長
R2.3.31	松原 和夫	辞任	薬剤部教授 ➡ 和歌山県立医科大学薬学部開設準備室教授・附属病院薬剤部長
R2.3.31	清水 章	辞任	臨床研究総合センター教授 ➡ 京都大学研究推進部特定職員
R2.3.31	横出 正之	辞任	臨床研究総合センター教授 ➡ 京都予防医学センター動脈硬化診療部長
R2.3.31	角山 正博	辞任	手術部准教授 ➡ 京都市立病院麻酔科部長
R2.3.31	住吉 真治	辞任	病理診断科講師 ➡ 天理よろづ相談所病院病理診断部部長
R2.3.31	宮本 心一	辞任	内視鏡部講師 ➡ 京都医療センター診療科長・消化器内科医長
R2.3.31	呉 東進	辞任	子どもの健康と環境に関する全国調査京都ユニットセンター特定教授 ➡ 障害児入所施設・療養介護施設埼玉療育園非常勤医師
R2.3.31	荒木 通啓	辞任	臨床システム腫瘍学講座特定教授 ➡ 国立健康・栄養研究所上級研究員
R2.3.31	鶴山 竜昭	辞任	創薬医学講座特定教授 ➡ 公益財団法人田附興風会医学研究所北野病院研究員
R2.3.31	櫻井 武	辞任	創薬医学講座特定教授 ➡ 社会医療法人大雄会嘱託医
R2.3.31	堀部 智久	辞任	薬剤疫学特定准教授 ➡ 長浜バイオ大学教授
R2.3.31	南後 恵理子	辞任	分子細胞情報学特定准教授 ➡ 東北大学多元物質科学研究所教授
R2.3.31	曾根 正勝	辞任	代謝制御学講座特定准教授 ➡ 聖マリアンナ医科大学教授
R2.3.31	小林 牧	辞任	免疫ゲノム医学講座特定准教授 ➡ 免疫ゲノム医学講座（産学共同）特定准教授
R2.3.31	Begum Nasim Ara	辞任	免疫ゲノム医学講座特定准教授 ➡ 免疫ゲノム医学講座（産学共同）特定准教授
R2.3.31	茶本 健司	辞任	免疫ゲノム医学講座特定准教授 ➡ 免疫ゲノム医学講座（産学共同）特定准教授
R2.3.31	THUMKEO, Dean	辞任	先端医療基盤共同研究講座特定准教授 ➡ 創薬医学講座特定准教授
R2.3.31	高橋 めい子	辞任	ゲノム医学センター（疾患ゲノム疫学）特定講師 ➡ スーパーグローバルコース医学生命系ユニット特定講師
R2.3.31	平塚 拓也	辞任	創薬医学講座特定講師 ➡ 大阪府済生会茨木病院部長
R2.3.31	谷口 智憲	辞任	免疫ゲノム医学講座特定講師 ➡ 免疫ゲノム医学講座（産学共同）特定講師
R2.3.31	藤本 晃司	辞任	脳機能総合研究センター特定助教 ➡ リアルワールドデータ研究開発講座特定准教授

R2.4.1	岡田 知久	採用	脳機能総合研究センター特定准教授 ➡ 脳機能イメージング准教授
R2.4.1	金井 雅史	採用	臨床腫瘍薬理学・緩和医療学講座特定准教授 ➡ 腫瘍薬物治療学准教授
R2.4.1	荒川 芳輝	採用	脳神経外科特定講師 ➡ 同講師
R2.4.1	増井 俊彦	昇任	肝胆膵・移植外科学講師 ➡ 同准教授
R2.4.1	小林 恭	昇任	泌尿器科学講師 ➡ 同准教授
R2.4.1	瀬尾 智	昇任	肝胆膵・移植外科学助教 ➡ 同講師
R2.4.1	黒田 隆	昇任	整形外科助教 ➡ 同講師
R2.4.1	片岡 竜貴	採用	臓器移植医療部講師 ➡ 病理診断科准教授
R2.4.1	田中 具治	昇任	手術部講師 ➡ 同准教授
R2.4.1	田浦 大輔	昇任	代謝制御学講座特定助教 ➡ 同特定准教授
R2.4.1	吉原 亨	昇任	附属動物実験施設特定助教 ➡ 同特定講師
R2.4.1	橋本 求	昇任	リウマチ性疾患先進医療学講座特定助教 ➡ 同特定講師
R2.4.1	伊藤 宣	採用	整形外科分野准教授 ➡ リウマチ性疾患先進医療学講座特定教授
R2.4.1	大槻 元	採用	白眉センター特定准教授 ➡ 創薬医学講座特定教授
R2.4.1	松本 繁巳	採用	腫瘍薬物治療学分野准教授 ➡ リアルワールドデータ研究開発講座（産学共同）特定教授
R2.4.1	丹羽 房子	採用	小児科助教 ➡ 子どもの健康と環境に関する全国調査京都ユニットセンター特定准教授
R2.4.1	沖 真弥	採用	九州大学大学院医学研究院講師 ➡ 創薬医学講座特定准教授
R2.4.1	山田 敦	採用	先制医療・生活習慣病研究センター特定講師 ➡ 臨床情報腫瘍学講座特定准教授
R2.4.1	杉山 治	採用	先制医療・生活習慣病研究センター特定講師 ➡ リアルワールドデータ研究開発講座（産学共同）特定准教授
R2.4.1	KIM, Minsoo	採用	白眉センター特定准教授 ➡ 細胞機能制御学特定准教授
R2.4.1	中村 勝	採用	日本医療研究開発機構主幹 ➡ ゲノム医学センター（疾患ゲノム疫学）特定講師
R2.4.1	堀松 高博	採用	厚生労働省健康局健康課課長補佐 ➡ リアルワールドデータ研究開発講座（産学共同）特定講師
R2.4.30	尾関 宗孝	辞任	法医学助教 ➡ クリニカルバイオリソースセンター特定講師
R2.4.30	坂本 達則	辞任	耳鼻咽喉科・頭頸部外科学講師 ➡ 島根大学医学部教授
R2.5.1	後藤 公志	採用	運動器機能再建学講座（寄附）特定講師 ➡ 整形外科学准教授
R2.5.1	中島 沙恵子	昇任	皮膚科学助教 ➡ 同講師
R2.5.1	江川 形平	昇任	皮膚科学助教 ➡ 同講師
R2.5.1	中川 正宏	昇任	メディカルイノベーションセンター DSK プロジェクト特定講師 ➡ DSK（Ⅱ期）特定准教授
R2.5.1	甲斐 慎一	昇任	手術部助教 ➡ 集中治療部講師
R2.5.1	加藤 貴雄	昇任	循環器内科助教 ➡ 先端医療研究開発機構講師
R2.5.16	梅田 達也	採用	国立精神・神経医療研究センター神経研究所室長 ➡ 脳統合イメージング（高次脳形態学）准教授
R2.6.1	牧山 武	採用	循環器内科特定講師 ➡ 地域医療システム学講座特定講師
R2.5.31	小林 慎治	辞任	EHR 共同研究講座特定准教授 ➡ 国立保健医療科学院上席主任研究官
R2.5.31	田崎 淳一	辞任	地域医療システム学講座特定講師 ➡ 循環器内科助教
R2.6.1	大鶴 繁	昇任	救急部准教授 ➡ 初期診療・救急医学教授
R2.6.1	多田 春江	採用	先端医療研究開発機構特定准教授 ➡ 先端医療研究開発機構准教授
R2.6.1	山田 洋介	採用	病理診断科特定助教 ➡ 臓器移植医療部講師
R2.6.1	宇座 徳光	昇任	内視鏡部助教 ➡ 同講師

謹んでご冥福をお祈りいたします						日付はご逝去日		
森沢 曜	昭和 20 年卒	令和 2 年 2 月 14 日	児玉 三千男	昭和 26 年専卒	令和元年 8 月 11 日	雨宮 次生	昭和 38 年卒	令和 2 年 3 月 15 日
早野 薫夫	昭和 23 年卒	令和 2 年 5 月 14 日	小原 幸信	昭和 27 年卒	令和 2 年 5 月 2 日	見島 義行	昭和 40 年卒	令和元年 7 月 6 日
片山 虔	昭和 23 年専卒	令和 2 年 2 月 3 日	大西 啓隆	昭和 28 年業卒	令和元年 10 月 28 日	与那覇 昇	昭和 40 年卒	
溝口 史郎	昭和 24 年卒	令和 2 年 1 月	村井 淳志	昭和 29 年卒	令和 2 年 3 月 29 日	矢田貝 凱	昭和 41 年卒	令和 2 年 4 月 2 日
植田 貞次	昭和 24 年専卒	令和 2 年 3 月 8 日	小澤 和恵	昭和 31 年卒	令和 2 年 4 月 13 日	清水 和也	昭和 52 年卒	令和 2 年 2 月 27 日
河本 春樹	昭和 24 年専卒	令和 2 年 1 月 24 日	中川 忠幸	昭和 33 年卒	令和 2 年 2 月 3 日	竹村 元三	昭和 58 年卒	令和 2 年 3 月 9 日
岩橋 五郎	昭和 25 年卒	令和 2 年 2 月 26 日	久野 健志	昭和 34 年卒	令和 2 年 3 月	山本 昭吾	教室会員 内科 1	平成 30 年 9 月 12 日
小島 博助	昭和 25 年業卒	令和 2 年 3 月 18 日	伊東 政敏	昭和 36 年卒	令和 2 年 4 月 20 日	長井 征夫	教室会員 内科 3	平成 31 年 4 月 25 日
細川 汀	昭和 26 年卒	令和 2 年 1 月	井本 勉	昭和 36 年卒	令和 2 年 3 月 27 日	安岡 正具	教室会員 耳鼻科	令和 2 年 5 月 13 日

会員訃報

制作協力 京都通信社
デザイン 納富 進

芝蘭会事務局
事務局長 山田均
総務課長 秋山和美
管理課長 森勝二

小澤同陽、大島輝、野洲春菜
（2 回生）三宅大河、小林空暉、
福井貞孝
（3 回生）奥野芳樹、青木ちひろ、
吉村太貴、樺井良太郎、濱田草太
秋宗俊久、原明弘、森田瑛

（6 回生）加古敦也、松本一希
（5 回生）谷本将崇、小野謙騎、
西垣利彦
（4 回生）岡和来、西村健太、
（3 回生）岡和来、西村健太、

顧問 高折晃史

芝蘭会雑誌部

委員 中村保幸、吉岡秀幸、

清川岳彦、園部誠、松村由美、

甲斐亜沙子、諫田淳也

芝蘭会報編集委員会
委員長 高折晃史
委員 中村保幸、吉岡秀幸、

清川岳彦、園部誠、松村由美、
甲斐亜沙子、諫田淳也

芝蘭会報は、会員の皆様の
情報交換・意見発表の場で
あります。支部活動、クラ
ス会、会員の著書の紹介（自
薦・他薦）及び医学・医療
等に関するご意見等を寄稿
ください。なお、原稿の採
用及び掲載時期については、
編集委員会が決めさせてい
たきます。

原稿募集

平成17年4月からの「個人情報
保護法」の全面施行により、
個人情報の取り扱いに厳しい制
約が課せられました。つきまし
ては、会員の連絡先等のお問
合わせは、必要理由等を明記の
上、郵便または FAX により事
務局までご送付ください。電話
でのお問い合わせにはお答え致
しかねますので、ご了承ください。

事務局から
FAX 075-752-4015